

生 真

第 四 卷 第 四 號

□今は丁度夜の二時である殆んど一家も寝しづまり隣り近所の人たちも全く眠りについた頃かと思える。犬一疋の鳴聲もせぬ。

□而も過ぎゆく人生の一生はかゝる中にも刻々として過ぎて行く、机の上の時計がカチカチと分秒を刻んで行くのも其のこゝを示す様である。

□静に想へば何といふ不思議な人生であらう。無限の過去から無限の未來に刻々として時は移る。

□悠久たる天地の間人生の五十年何するものぞ、人生今にして醒めずんば何の時に此の身を醒さん、人は寢ている間にもかくて人生は刻々として過ぎて行く。

□然に人は何故にさめぬであらう。来る日も来る日も。人生ほど不思議な世界はない。而も吾人の爲すところ果して何を意味してゐるか。

□静に多くの人々を見るに、肉慾と財慾と名譽の外に人間としての望みはない。而も墓場に多くの人々は急いでゐる。乍然友よ吾々は果してそれで満足であるか。

□友よ、吾人は何故永劫の自己に醒めぬのであらう。静に現實の無常と自己本心の永生を思ふとき吾等は今少しく眞實の人生に目醒めねばならぬでないか。

□限りある人生の生！而も刻々に過ぎ行く人生の行路を見ずや永劫に輝く如來の光なかりせばいかでか眞實の喜びがあらう。

——(念)——

いなが死はに佛

□佛には死がない。死んだからとて亡くならぬのが佛で、又無くなるやうな人格は一つもない、みな不滅の生命である。

□私達が便所の中に居る時は便所の中の人間となつてゐる、食事をしてゐる時は食事をしてゐるといふ人格になつて居る、或は働いてゐる時、泥棒をしてゐる時、皆な、各々の値打となつて現はれてゐる。便所の中に其人が居なくなつたからとて其人が無くなつたのではなく、食事中の人間となつてゐる、又食事を已めたからとて仕事場の人間となつてゐる、姿は變つてもそこに一貫した一の連續人格がある。今假りに我々が死んだからとて便所から仕事場へ移たやうなもので矢張り仕事場の人間として生きてゐる、即ち死はなく常に生き生きてゆく生の連續ばかりである。

□併し仕事場に居る時の人格は便所に居た時の人格そのものではない。悪をやつてる時の人間は嘗て善人であつたからとて其刹那には善人ではない、悪人である。それと同時に嘗て悪人だつたからとて永久に悪人ではない、善をすれば其時直ちに善人といふ人格になつて了ふ、だから悪人だつたからとて悔しむ事も要らねば、善人だからと云つてもそれだけで總てではない。

□現在に於ては善であるけれども、次の一瞬には惡に轉するやうなものであつたら完きも、今は云へぬ、現在の一瞬は過去の一切を脊負てゐる集積であると共に、未來永遠に向つての最上價値を創造してゆく不滅の刹那であらねばならぬ、單なる過去或は現實の價値よりも永遠の價値に向つて動いてゐる過現であつたら、それこそ眞の價値である。時空善惡一切の相對を絶して此理想に生きてゐる時、地獄も餓飢も一切救はれであり平等である。そこに十界皆成の大生命界がある。

□常に向上の一路に在る。現實にも泥まず、過去にも落捨せず、進展して己まぬ無窮不斷の躍進こそ信仰である。如來は常に我心の奥に在りて斯る力となつて下さる、又高く理想の目標となつて招換し玉ふ、實に佛には死がない、救はれたる者には常に望みと喜びと力が充ちてゐる。

(剋子)

目次

- 佛には死がない 剋子
- 光明主義と異心(一) 土屋觀道
- 懺悔錄(二六) 演 阿彌
- お、念佛よ(三) 山 日 常 照
- 吾朋便り

▽腹のひもじい者には食が必要である。それを何故働かぬと云はれても仕方が無い、働く氣力が無いのだから。

▽飢れたる者は先づ食を求めがよい、パンの代りに石を與へるやうな佛はないから必ずや充たされる時が来るだらう。

而し食に酔て食を享樂してはならぬ、それは本當に食を攝してゐる事にはならぬ、本當にお慈悲を喰ふといふ事は、喰たお慈悲に働かされるといふことだ。

▽お慈悲を前に置いて見てゐる丈けではまだ喰つた事にはならぬ。又口の中へ入れて舌の上で融かしてゐるだけでは喰つてゐる事にはなるかも知れぬが喰つた事にはならぬ。かと思ふて其お慈悲が胃の中へ入つて胃の腑の中でゴロゴロしてゐては、まだ丸込みにした丈けで喰つたことにはならぬ。本當に喰たといふのは悉皆我内でお慈悲が消化してお慈悲の形がなくなり、その代りお慈悲が力となり我全身に巡り、内から私を働かす原動力となつて下さる事をいふのである。

▽もう其時には如來さまのお慈悲でもなくて、我が力であり我ものであり、「我れ」となつてゐる。小さい乍らも茲にお慈悲の化身が出来てゐるのであり、如來が亡くなりて一方に新しく如來が生きてゐられるのであり、如來が我になつて下さつたのであり、我が如來へ歸つたのである。本來自爾の私として立たして戴く、此私を外にして如來もなく私もない、爰では如來に歸命するといふ事は此眞生そのものに立つといふことである。

(剋)

光明主義と異安心 (一)

土屋 觀道

近頃各地に於て光明主義と云ふ名のもとに色々の集團ができた。而て之に對する是非の論難がやかましく聞けて來る。乍然之等の論點が何れにあるかを傾聽するに一として眞にとるべき何ものもない。之は主として光明主義に對する眞の理解がない所から來るのであらう。けれども其の爲めに光明主義に對する多くの語解が之等の人々によつて多くの人々に語り傳へられるのは遺憾である。茲に於て私は其の世間の批難に對し及ばす乍ら少しく自分の所見を述べて其の誤りを訂して見たいと思ふのである。乍然之に先きだつて第一に心得ておくべきは同じ光明主義と云ふ人々の中にも色々あつて、法然上人を捨て、辨榮上人のみをとるものと、法然上人を中心として辨榮上人をとるものとの別がある。而て前者は全々法然上人の淨土宗を第二期の未來教であり、諸宗の中の一宗であり、十方の中の一方、諸佛の中の一佛、諸行の中の一行として之等の指方立相を排拆し、偏に辨榮上人の光明主義を第三期の圓具教なりと主張して現世より來世を貫く最高の宗教とするのである。然ば後者の方は如何なるものかと云ふに其中に又大別して三流がある。其の第一は從來の淨土宗を中心とする光明主義で辨榮上人の光明主義は從來の淨土宗義と異なるものでなく淨土宗の外に異つた光明主義といふものがあるのではないと、斯くて今日の光明主義を從來の淨土宗義に會通するものである。而て若し二者の間に相異なる點があつた場合

にはそれは隨地扶宗の心であるとして辨榮上人の教説を捨て、法然上人の教説に従ふ所の人々である。乍然之ならば折角の故上人の新しい見解は皆悉く衰滅に歸るではないかと茲に於て所謂第二の光明主者が現れた。夫れば所謂辨榮上人の教義を以て絶對依據の教權とするの人々である。而て其の云ふ所を聞けば辨榮上人は實に近代稀なる宗教的偉人である。さうして己に三昧發得の人である、故に上人の所見と所説には誤りがない、だから吾人は其の説に従ふ、そこには一言一句吾等が訂正を許さない。故に吾人は從來の淨土宗義を捨て、偏に辨榮上人の指南による。何となれば淨土宗なるものは宗祖自らの建立でなく、それは二祖三代の教義と云て、善導法然の二祖、及び法然鎮西記主の三代相承の説なりと後代の人が勝手に定めた宗義に過ぎぬ。然に之等の人々は未だ一人として三昧發得の人々でない、従つて眞に宗祖の眞髓を承け傳へた人とは云へぬ。だから從來の淨土教義を以て直に法然上人の教義であると斷定することは所謂一つの盲斷である。従て今日の人々が此ことを知らずして法然上人の宗教かの如くに信じてゐるのはそれこそ全くの盲信である。而も近頃光明主義者と云ふ人の中に明に此の事を知らずして自分勝手に習い覺えた概念宗學を以て辨榮上人の光明主義を淨土宗義に會通する者がある。乍然斯の如きは明に眞の光明主義を不明ならしむるものであり、従てそれは故上人の眞意でなく又眞の光明主義でもないのである。眞の淨土宗少くとも法然上人の眞の淨土宗は故辨榮上人の見られた所によつてのみ初めて眞の生命を現はすものである。故に從來の淨土教義なるものは全々茲に解体して正に辨榮上人所説の光明主義にならねばならぬ。従て從來の淨土宗義と光明主義との間に相違點のあるときは勿論從來の淨土宗義を捨て、辨榮上人の見られた所説に従ふことが正當である。又それが眞實の光明主義であ

ると云ふのである。乍然故上人が果して三昧發得であるといふことを誰が知り得たのであるか、何を証據に之を斷言し得るのであるか自ら体験なくしては眞に之を知ることではできないではないかとこゝに始めて第三の体験主義の光明主義が現はれた。然ば第三の光明主義とは何であるか、それは以上の所説に満足せずしてどこまでも如來を中心とした体験の生活に立つ人々である。換言すれば祖師の法語であるが故にとの條件や、辨榮上人の仰せであるからと云ふだけの教權ではなくして祖師の法語や上人の教へによるもどこまでもそれを自己の体験生活の上に乗せ、自己の体験を深めやうとするの人々である。従て祖師の法語や上人の法語なるものは其の當時に於ける彼等先覺の体験ではあらうが、其の言ふ所が何も大切なものではない。而て眞に大切なものは其の言葉によつて現はされたる先覺自身の体験と等しきものを自己に体験するといふことである。故に吾人は其の言葉にのみ捕はれずして其の言葉によつて現はされたる祖師の体験と等しき体験を自分自身に体験するといふことが最も大切であるとす。故に法然上人を以て念佛開宗の元祖となすことは勿論であり。又故辨榮上人を以て其の流れをくめる最も偉大な先覺の一人となすことももどよみであるけれども、吾人はそのみによつて自己の体験を無視するものでないとするのが此の第三の主張である。

而て私共は此の意味の流れこそ眞實の宗教であると信するものであるが。而も亦第三光明主義の人々は淨土宗を開かれたる法然上人と光明主義を説かれたる辨榮上人と其の間に於ける念佛信仰の中心に對しては其の体験に於て寸毫の異りもないと信するものである。乍然其の体験の發表や形式に至つては或は時代の春景により或は個性の相異によつて多少の異なる所のあるはまだ止むを得ないこととす

る。否それは寧ろ時代の變遷、思想の發達人類の進歩に於て當然なことであらねばならぬ。而もそのことを何によつて知るかと云へば日頃上人に接したる吾人として且又上人御自身の著述によつても之を知ることができるのである。従て故上人は宗祖の皮髓を顯はしながら、そこに又自己の皮髓も説かれてゐる。而かも宗祖の皮髓と辨榮の皮髓と別に二つがあるのでない。故に若し此の二者の間に宗義の相異點のあるやうに見ゆる場合にもそれは時代の變化に過ぎない。従て其の兩者の眞髓を極むれば二者は全く同一である。故に必ずしも初めより何れによるべしと斷定することはできないのである。而も宗祖や上人の言葉であるからとて必ずしもすべてを之によらねばならぬとするのではない。何となれば同じ宗祖の法語や辨榮上人の言葉でも必ずしも夫等の人の眞筆でないのもあり、又よしそれが其の人の眞筆であつたとしても其の時代を異にした今日に於てそれがそのままに今尙用いられるとは必ずしも、今日に於て限られないからである。而も尙一步譲つてそれが直に今日に於て摘用せられるものであつたとするも果して之を聞くもの、之を承くるものがどれほどまでに之等の人の眞意をそのままに正解し體現しうるかは實に疑問であるからである。凡そ吾人の實力は如何に努力し注意しても結局はその人の力だけにしか之を承ることができないからである。茲に於て吾人は自己に何等の体験なくして妄に先徳の法語のみをかつぐ人の心のほどをむしろあはれと思はざるを得ないのである。凡そ眞實の宗教は結局は各人自らの体験にまで立ねばならぬものである。而て如何に偉人が体験深き眞の体験を説くとしを承ける人々に於て之を承くるの實力なくば決して之を眞實に相承することゝはできないものである。而て此のことは又直に一切の先哲の言葉や著述を頑味する上に於ても亦同じである。故に第三の光明主義者はみだりに自らの体験もなくして、祖師の法語や、上人の法語を以て信者に強いんとするが如きは慎

まねばならない事とする。従て二者の間に言葉の相異があつても妄に之を何れにせねばならぬなど肯断することはせないのである。さればかゝる場合には先づその法語の含める真意を研究して自己の体験にまで之を頑味するのである。而て斯くの如きの眞劍の態度は必ずしも宗祖と上人との上のみ限られたものではなく、すべての人の生活の上にも之と等しき体験を以て之に對すべきものとする。然し乍ら世に体験と云ひながらもその体験にも亦無限の深さと廣さがあれば、その廣さと深さに於て更に吾人は一層の力努を以て此の限りなき体験の深みへと精進せねばならぬのが所謂第三光明主義運動である。而も自ら淨土宗といひうる所以のものは徒らに淨土宗の僧とか檀家に屬するが爲ではなく、正に宗祖の法語を以て自らの生活の上にも一味の体験として生活しうるが故である。又自ら光明主義といひうる所以も偏へに故上人の教へによつて自らの体験に進みうるが故である。従て彼等二人はごこまでも我等の思想の先覺であり、又我等の信仰の先輩である、而も之等の二聖は等しく阿彌陀佛を中心として自らの体験に生きられた人々であつて我等も亦之等に等しく如來を中心として進まんとするの道士である。友よされば吾人は同じ光明主義と云ふもの、中にも已に斯くの如きの流を異にし、且つ又其の思想信仰の態度内容を異にするものがあることを知らねばならぬ。而て吾人はかかるが故に妄に光明主義を難する人に會つても之を恐れることもいらぬのである。而てそれよりも先づ吾人は此の中に於て何れの信仰に屬すべきであるか。而て又所謂光明主義を批難する人々は此の中の何れのものに於て何れののであるか、吾人は先づ此の内容の點檢を先きにして而もおもむろに之に對する一々の批評をこそ正に受くべきである。而てそれが正に道を求むる眞人の心からなる眞實の態度である。従つて又同じ光明主義者と云ふ多くの信者の人々もよろしく此の意味の態度を以て其の主義の内容を充分に點檢して其の人格的自己の体験を眞實の價値の生活へと現はすべく目醒めることが又何よりの道である。

懺悔錄 (廿八)

演 阿 彌

我が愛慕し奉る如來様よ。私の此の拙き一文も終りに近づいて参りました。如來様を始め多くの方々に長い間聞いて頂いた事を感謝いたします。手控への記録を順次に拾つて書いて行けばまだ色々申上可き事も有りますが、夫は又折々申上げる事にして今は唯二つ丈を描出して此懺悔録を結びたいと存じます。夫は如來様の正道と慈悲とに關する事でありませう。私達は今迄慈悲とし云へば悲しい時には共に悲しんで慰め、苦しい時には共に惱んで安けさを與へて呉れる其暖い柔かな慈みと思遣りとの大きな抱擁が夫れだと思つて居りました。夫が、無論夫も慈悲の一面には相違無いけれどもソウした純感情的な事ばかりでなく、知見するべく物の眞相を理解せしめて其事理を明白に諦めしめ或は神聖なる價値其物に氣付かしめて私達の行為を鞭撻し精進せしめんとする事が純感情的なる

柔かな物よりも更に大なる慈悲の輝きを顯現して居る事を知らぬばならなかつたのであります。同じお話でも單に柔かなものが慈悲深く而して信仰的であるかの如く思つたのはまだ私達が幼稚であつたのであります。正直に白状しますれば我が上人のお話の如きは寧ろ理智的であつて敬虔な宗教感情を促がさないもの、如く誤解せられて、幼稚な私達の頭には宗教談と云ふよりも一種の哲學講演を聞かされて居るかの如く思ひなされたのであります。随つてむつがしくよく判らないと云ふ様な批評も時々聞かされたのであります。之等は畢竟此方が無知であり至らなかつたからであつてあの條理整然として徹透せる理論に對しては誰人も全く驚歎せずには居られないのですからかくの如き批評は桁外れであり随つて問題にはならないのですけれども、如來様の御慈悲と云ふ事に就て慈悲其者を解する事が間違つて居つた爲めに其間違つた慈悲を要求せんとする地位にある人々には一種の物足りなさを感じて、今少しく感情的にし

て欲しいと望んだのも強ち無理では無いかも知れないのであります。然し乍ら實は夫れも誤りないのであります。私達は常に自己を基準にして人を律し様とするのであります。例へば不動の忿怒が其實忿怒其者でなくて慈悲の姿であつたと同様に明徹なる知見が纏がて直に溫き慈悲の姿にあり、峻烈なる鞭が纏て尊き慈愛の變形である事を知らねばならぬのであります。「父は打ち母はいだいて悲しむを變る心と子や思ふらん。」よく聞く歌ではありますけれども之は單なる一説話に非らずして深刻なる人生の一大重要事實であります。然しかうした事例に對しては苦もなく承認し乍ら、我身上に振りかゝる事柄になると唯だ徒に感情に左右せられて其奥底の深意に思ひを運ばせ得ない悲しさを見るのであります。要するに私達は薄つべらであり皮相であり獨斷であり生半可であります。殘念乍ら自分自らを反省する時、此事丈は是認せねばならず而して同時に夫であつてはならないと云ふ痛切なる後悔の涙に暮ればならぬのであります。自分が薄つべらであり且つ何處迄も自分の

見方を是とせんとする獨斷の惡癖は是非共矯めねばならないのは個性の致す所か、夫を是正し得ない憐れな拙い自らを眺める時、人生また難い哉の歎聲なきを得ません。本當に上を見れば限りがないとは云へ何處迄も向上せしめずには置かない此全心を揚げての願ひは實に止むに止まれぬ者であります。少くとも一を聞いては十を知り、一端を見ては全豹を知り、相に觸れては中心を貫く底の識見なくてはならないのに事實はとも御話にならず我れ乍ら實に呆れ返らざるを得ないのであります。私達は全く如來様を離れてはごうもかうもならない本當に憐れな弱い弱い輕毛の凡夫であります。然も此反省はともすれば何時の間にか忘られて自負となり自愛となり自慢となつてます。其拙劣さを暴露して居るのであります。而して同時にゑら相に他の批評を臆面もなくして居るのであります。大正十二年の一月の刷時の最後の日であつたかと思ひます。上人が「我れ信仰に入つて以來十有餘年、靜かに願れば實に暗憺として

鈍た涙なき得ない」と云ふ痛切なる感慨の數句を洩らされた時滿堂寂として聲なく皆夫々に深き反省に入つて唯だ滂陀たる涙のみであつた事がありました。之れは單なる一些事に非ずして其實深刻なる宗教經驗であつたのであります。私の表現の仕方が余りに簡單で其真相を寫し出し得ませんけれども、此の一經驗は引いて以て上人に對する理解を深からしむると共に私達將來に於ける進路が痛切に意識せられ而して慈悲其者に對する見解が一層廣められたのであります。誠に一切をよからしめんとする慈悲の發動は終に遺瀨なき悲痛の涙とならざるを得ない者であります。之は獨り先覺者のみに限るるに非ずして正しく信仰に目醒めた限りには誰人にも起る處の心理現象であらぬばかりません。而して此念の強ければ強い丈また其涙も多いものであらねばなりません。此故に「上人は畢竟理の人であつて慈悲の人でない」と眺めやうとした私達の誤りは此時朝日に霜の解くるが如く消え去つたのであります。成る程理論としては私達と雖も遠うの昔に語つた様な事をも云つて居

ましたが、然し我身の上には振りかゝる事實問題になると中々簡單には行かないのであります。叱られたら腹が立つ、惡口云はれたら氣持が悪い、而してうそでも褒められたら嬉しいに極まつて居る下らない様ですけれども之は多年の習慣に依つて然るのか、又た遺傳に依つて然るのかとも角にもかう云ふ心理は一般に通有的に持合せて居る様になつたのであります。而して色々の迫害に對しても堪へ得らるゝ限りは堪られ得ると同時に邪其者に對しては積極的に何處迄も之を膺懲せしむ可き方途に出でんとする様になつたのであります。之を思ひ彼を思ふ時誠に凡ての人の迷妄を切斷して眞實の理に目醒ましめんとする利刃の如き上人の態度は感情上にも正に大慈悲心の發動として顯はれたものである事を知らねばならぬのであります。地藏の笑ひと不動の怒りとは決して異つた者でなく、其立場立場に於て實に最高の價値を示めして居るものでありませう。惱める者に取つては不動の忿怒は余りに痛ましく地藏の愛語こそ無限の慰めと寛ぎとを得る者であると共に邪行を

なし醜惡なる心を改めざる者に向つては地藏の笑顔を寧ろ無慈悲に等しく却つて不動の怒りが其人を益するのであります。然し私達自らとしては自らの古疵に觸れらるゝを好まず唯だ妥協生活を以て一時を糊塗せんとするを好むが故に余程修養しない限り利として中々法性の正理に従ふが困難なのであります。茲にどうしても如來の正道を正しく踏んで尊き聖胎を長養せしめねばならぬと云ふ問題が残されて居るのを知るのであります。然かも一切の宗教は結局此問題に皈著する者であり、所謂法眼慧眼と云つた様な問題も要するに此問題への過程に過ぎないものであります。理窟は兎に角私達に容易く此正道が踏まれ得る時凡ての問題は解決されて仕舞ふのですから一天四海皆皈妙法解説も涅槃も正覺も法身も般若も此正道を踏み得らるゝ大勇者にのみ所有せらるゝのであつて此の一事を取り去れば一切は畢竟空華に等しいものであります。畢竟私達の生活をして正しからしむる事即ち人間としての最高價值に行動せしむる事の外には學問も道德も宗教も哲學もあつた者では

ありません。此事以外は凡て泡沫であり、遊戲であり、夢幻であります。此故に私達は何を差置いても此正道丈は寸時も踏みはづしてはならないのであります。然し乍ら之は一に正見なくしては出來得るものでありません。知見明かならざる者にどうして如來の正道が歩まれませうか。本當に此正見こそは凡てのもの根底でなければなりません。然るに私の如き生來魯鈍の者にどうして正見に住する事が出來得ませうか。思へば涙なきを得ません。余りに女性的な肺甲斐無きを披露する様で誠に残念ではあります。事實はどうしても曲げられません。然し唯一つの頼の綱は矢張り如來様へ南無する事でありませう。よいにつけ悪いにつけ此心のみは眞實であります全く附焼及でなく自然に内部から湧いて出る眞劍な心であります。此の唯だ一つの眞劍な稱名こそは無限の温さを以て憐れな私を抱擁してくれます。此處に淡くも私の一生を貫く第一義諦がある事を思ふて涙ぐまじき迄に歡喜を覺ゆるのであります。

(續く)

お一念佛よ！(三)

山口常照

お——求道苦悶の念佛よ！

自己の半生！そも何ぞ！！

肉慾と財慾と名譽の奴隷となりて

久しい間、しいたげられた我が心

奴隷の生活！亡びの命！

我は亡ぶ！ 確に亡ぶ！！

「自己の半生！そも何の價値ありし、

差別の波に、もまれにもまれ

貴賤と貧富と苦樂の順逆

賢愚と利鈍と 善惡美醜

泣いては笑ひ、笑ふては泣く

不平と不満と、焦燥と沈滞

庸僞と虚榮と、煩悶苦惱

嫉妬怨恨 墮落と死滅

實に恐るべき、暗黒の我！

我は亡ぶ！ 確亡にぶ！！

「自己の半生！そも何のひらめきぞ

暗黒の中に魂は亡ぶ！！

先はなし、希望は燃えず

前途は暗膽！ 苦悶の世界！！

やがて苦しさのあまりには

酒の世界！

姪慾の道！

芝居と音楽、運動と旅行

因果と運命、圍碁將棋

生れ出でたる生の惱みを

灰色の世界で胡麻化する。

折角の魂も靈魂のひらめきも

惜しむべしボカしてくらす。

我は亡ぶ！ 確に亡ぶ！！

「自己の半生！そも何の爲の人生ぞ

生存の意義も知らず

生死の解脱も自由を得ず

性のもだえ、肉の惱み！

怨めしきものとはあい、

愛すべき人とは別る

四苦の悩み入苦のもたえ！
我は亡ぶ！！ 確に亡ぶ！！

「お——私の生くべき道なきか
永劫不滅の道なきか

此の儘ならば我は亡び此の儘ならば我は死ぬ——

お——眞實の道なきか
死を越えて障を越えて

我は價値的生活を要求す

お——價値の生活よ！！

「其のとき一人の勝友ありき
要求を徹せよや

反省せよ！ 反省せよ！深く深く

その道を求めて徹せよや

たゞ一つ！ 眞劍に！

汝自身に徹せよや

自己を見よ、自己を見よ 自己本心の源を

全心捧げて全靈に祈れ！

其のとき汝の白道はひらく

妥協を廢して妥算を止めて

一心に正念に、命をかけて

至心に祈れ至心に祈れ！！

お——入信歡喜の念佛

甚深難思の光明を

至心不斷に念ずれば

信心喚起の時いたり

心の腫腫とはなりぬべし

悩みの中に涙の中に

眞實の道はたゞ一つ

たゞ一すちに一切の

如何なる誘惑をもふり切つて

あらゆる妥協打ちやぶり

煩惱の業火ものともせず

まつしぐらにとたゞ進む

進む！ 進む！ たゞ進む

その時金剛の力湧く。

「自己の本源そも何處！！

今我は生けり、何處より來る

父母より來る

其の又父母は？

父母の父母より、又その父母は？

生の本源に尋ね入る！

「言亡慮絶、離言の眞如

お——靈の源泉よ！

お——我の本源よ！

げに靈源よ！ 本源よ！

我は點す、たゞ點す！

眞如の都、我が故郷

時の流れの本源は

無量の壽絶えぬ流れ

久遠の命！ 久遠の流れ！

お——我は？ お——我は！

父母の慈愛に育てられ

近所隣りの恩恵に

學びの師に導かれ

道の友に勵まされ

君のめぐみ

のめぐみ

恵は更に世界のめぐみ

恵は更に宇宙のめぐみ

「光なくば熱なくば

空氣なくば、水なくば

我の生はなかりしものを

お——一切は恵なる

廣大無邊の恵なる

無量恵の無邊の恵

お——此の恵の光明に

我は！ 我は！育まる。

「さるにても永き眠に陥りて

無明長夜の夢久し

無限の壽にも氣がつかず

無量の恵にも目がさめず

毀譽褒貶の嵐に吹かれ

暗黒死滅の道に迷へる

灰色妥協に魂をぼかし

己が人格さすづくのみか

人の人格そこなひ盡す

初めて知りぬ初めて氣づく

罪惡生死の我なるに

お——痛ましき懺悔の涙！

とめどもなく頬を流る。

四苦の惱み八苦のもたえ！
我は亡ぶ!! 確に亡ぶ!!

「お——我が生くべき道なきか
永劫不滅の道なきか

此の儘ならば我は亡び此の儘ならば我は死ぬ—
お——眞實の道なきか
死を越えて障を越えて

我は價値的生活を要求す
お——價値の生活よ!!

「其のとき一人の勝友ありき
要求を徹せよや

反省せよ! 反省せよ! 深く深く
その道を求めて徹せよや
たい一つ! 眞剣に!

汝自身に徹せよや
自己を見よ、自己を見よ 自己本心の源を

全心捧げて全靈に祈れ!
其のとき汝の白道はひらく
妥協を廢して妥算を止めて
一心に正念に、命をかけて

至心に祈れ至心に祈れ!!

お——入信歡喜の念佛
甚深難思の光明を

至心不斷に念ずれば
信心喚起の時いたり

心の腫腫とはなりぬべし
惱みの中に涙の中に

眞實の道はたい一つ
たい一すちに一切の

如何なる誘惑をもふり切つて
あらゆる妥協打ちやぶり

煩惱の業火ものともせず
まつしぐらにとたい進む
進む! 進む! たい進む

その時金剛の力湧く。
「自己の本源をも何處!!

今我は生けり、何處より來る
父母より來る

其の又父母は?
父母の父母より、又その父母は?

生の本源に尋ね入る!

「言亡慮絶、離言の眞如

お——靈の源泉よ!

お——我の本源よ!
げに靈源よ! 本源よ!

我は點す、たい點す!
眞如の都、我が故郷

時の流れの本源は
無量の壽絶えぬ流れ

久遠の命! 久遠の流れ!
お——我は? お——我は!

父母の慈愛に育てられ
近所隣りの恩恵に

學びの師に導かれ
道の友に勵まされ

君のめぐみ
のめぐみ

恵は更に世界のめぐみ
恵は更に宇宙のめぐみ

「光なくば熱なくば

空氣なくば、水なくば

我の生はなかりしものを

お——一切は恵なる

廣大無邊の恵なる
無量恵の無邊の恵

お——此の恵の光明に
我は! 我は! 育まる。

「さるにても永き眠に陥りて
無明長夜の夢久し

無限の壽にも氣がつかず
無量の恵にも目がさめず

毀譽褒貶の嵐に吹かれ
暗黒死滅の道に迷へる

灰色妥協に魂をばかし
己が人格さすづくのみか

人の人格そこなひ盡す
初めて知りぬ初めて氣づく

罪惡生死の我なるに
お——痛ましき懺悔の涙!

とめどもなく頬を流る。

「此の流の洗禮受けて

初めて合掌の心起りぬ。

衷心よりの合掌を

枯死に瀕せる魂が

懺悔の涙の洗禮受けて

蘇生の心に 復活の姿に

雄々しき決心胸に躍る

我れ永遠の生に生き

我れ絶對の自由に立たん。

如何なる境遇に置かれても

此の本願に我生さん

貧に迫まられても

死に迫まられても

此の本願の爲ならば成は死なん

「見よ暗黒の人生に

榮光の旭日はさし昇る

力は漲り澎氣はあふれる

懺悔の涙は今にはや

歡喜の涙 感謝の涙

おのが姿も見えそめて

強められ行く合掌は

心の光り、心の祈り

送り出で 送り出づ

(續く)

宗教座談 (五)

藤井貞邦記

都「人を使ふのは難かしいもので親切が却つて仇になることがあります。私も先方の爲めといふ事を思つて貯金をさせたりいろ／＼やつて見ました

が小金が溜ると逃げ出したりします。そして大抵行詰つて居ます。世には正直な人が反て失敗し、不正直な人が反て成功して居るやうですが。上「他のため已のため金を貯めさすといふ考は進んでは居りますが己も五圓お前も五圓といふ處を出ないですね。本心の満足といふ處まで行かないと金錢に左右されます。經濟の價値を正しく知ら

ないといふのは惱みの多いものでせうか。直では却つて成功しないといふ人がありますが。さういふ人は正直とは唯嘘を言はぬことだと思つて居る。そして嘘を云ひさへせねば愈けて居ても無計畫の活動でも成功するものと思つて居るらしい然しそれこそ却つて天地の道理に背いて居るのですから失敗するのは當然ですわね、商人は商賣の研究をなし、農家は農業の研究をして其の道に活動することが眞に正直ではないでせうか。それに成功とは金錢を得ることだのみ思つて居る人が多いのですがそれが又大きな誤りです。クリストは金錢どころか肉体まで失つてゐます。それでもクリストを永遠の失敗者だといふ人はありません。一体皆さんは何を成功だと思つてゐます。釋尊が一切世間の俗事を捨て、一生を道の爲めに盡くされたそこに献身の大業を成せられたのでありませう。金や命に目をかけて何で献身の大業ができませうぞ。人類の成功は眞實に生きることです。長「日蓮は泣かぬとも涙ひまなしと云ひクリストは時々山に行つては泣いて來たと聞いてますが宗

教家といふのは惱みの多いものでせうか。上「日蓮の涙ひまなしと云ふたのはその涙ではないのです。求道者の却つて不眞面目なことをなげぎこれ程大切な信仰をなせ求めないかといふ涙です。長「さうですか私は宗教家の法悦といふものは惱みの大いだけそれだけ大いので、つまり對比的のものではないかと思つてました。上「尤も釋尊やクリストにも人としての惱みはあつたやうであります、乍然その惱みの中にも人生をあやまるやうな惱みではなかつたやうです、むしろそこを打ち破つて行くところの堂々たる大自覺者の態度を示して居ます尤も之は神佛として後代の人があまりに是等の人々を神話化してしまつたために反つて眞の人間味を無くした氣味がありますが、其の點になると原始經典としての阿含經などにはよほど人としての釋尊が現はれてゐます尙親鸞法然の如き人々には尤も多くの人間味が出てゐます。従て自己の行爲に對する罪惡の惱みも多いやうです。乍然吾々の本心はいつまでもか、

る状態に安じてはいられません。従て之を根本から打破する所に眞の人生が輝くのです。「炭が火に會ひて火となる如く人も佛に會ひて佛とはなる」と之が私共の自覺であります。煩惱即菩提です。妄想雜念の起るのを直に破るのが光です。従て人生は煩惱多しとて悲觀するには及びません人間か今位の程度で妄想雜念が起らなかつたら念佛唱へる氣にもなるまいしそれが果してよい事か悪い事か分らぬではありませんか。妄想雜念の起る程度のものが起らぬ程度にまで進みたいと云ふのが眞の念佛です。法然上人は「雜念の起るのは凡夫であるからだ。だから佛に縋りなさい」と世間的に云うて居られます。

長「宗教に依らないで人生の光明化は出来ないものですか」

上「光明とは人格の光のことです。人格の標準をここに置きますが、宗教は實に人格の中心生命であります。神としての生活、佛としての生活之ほど人生として尊嚴な人生がどこにありませう。宗教に依らない人生は到底眞の人生たることはでき

ないものです。人生の光明化とは即ち人生の人格化です。而て其の人格の充實が即ち佛陀の生活である限り宗教を離れて眞の人生はないのでありませう。

夜は吾々團体外の東京帝大大學院生H氏等訪ね来る。

H「宗教の進化といふ事をどう見て居られますか」
上「宗教の進化ですか。吾人は釋尊の如き解脱境に至らうとするのでその境地は絶對です。しかし個人がその境に至るのは其理想の全分を實現せるや一部分を實現せるやに依つて進歩の階程があります。之を人類發達の過程の上に見るならば宗教の進化であります。而て之を個人の上に見るならば宗教進歩の階段と見るべきです。私は之を分て四階程に見てゐます。

第一が求道煩悶の時代です。世には人生の意義も考へずさうした苦悶さへない人があります。乍然人はいつまでもさうした生活で永劫に満足する人ばかりではありません。さうしてきつと人生の眞意義を知りたいと云ふ時代になつて來

るものです。そこには永遠の生命と無限の向上

を要求するに至るものです。而も此の要求を満たすものが眞の宗教なんです。乍然之を求めて未だ得ざるの時代があります。之はご人として眞に苦しいものはない、求めて得ざれば人生の悩みであります。さればといつて其の悩みの爲めに寧ろ宗教を止めたがよいかと云ふにそれはもとより出来ないのです。故に此の道を求めて來た得ざるの時代を名づけて私は求道苦悶の時代と云つて居るのです。

第二が入信歡喜の時代であります。此の時代と云ふのは初めて眞實の信仰に入つた時代なのです。それこそ今まで求めた人生の眞義が明かとなり、如來の大悲に攝取せられた當体を云ふのであります。人生最大の至幸を感信心する歡喜の時代を云ふのであります。所謂入信の當体を云ふのであります。第三が修道念佛の時代之は入信の後暫く専修念佛の生活に入るのでありまして、如來對我の間に融合一体ならんとする靈化生活の時代であります。所謂向上の一路

をたぐる念佛專修の修道時代であります。

第四が成佛即覺佛體現の時代です。之は前の第三修道時代が段々と進むに従つて自ら神としての生活佛としての生活に立たんことを欲するに至り、やがては自ら佛として又神としての眞人の生活に立つの時代であります。

H「念佛をお勧めになるのに反省の上から人生の意義をどう認めておすゝめなさるのです樂天的に認めてゐますか。厭世的に認めてゐますか。

上「念佛の意味にもいろいろあります。あなたのははれる念佛とはどういふ意味の念佛についてお尋ねです。

H「クリスト教等は人々一々の行爲を反省させて悔改めよと云ふて信仰に導く様にして居ますがあなたのはどういふ風に導かれるのですか。

上「佛教でも反省といふことは極力之をつとめるものです。言かへれば佛教ほど自己の行爲に對して深い反省をするものはありません。乍然悔改めと云ふことについては大なる問題が横つて居るのです。何となれば吾人は如何にして此の

悔改めを成就するのであらう若し人間が一べんの悔改めで悔改め得られるものならば神佛の救いは要らないことになるのでありませう。然に人間は悔改められない程弱い所があるもので、そこがクリスト教には分らない。佛敎はさういふ哲理にまで突込んで賢愚共に念佛の一行で進める道が開いてあるので、人間は弱ければ弱いです。まして居られないので、それが人間の本心です。悔改めを包括して念佛一行のあるのは面白い事です。

H「承る處によると最後の理想が餘りに遠いので信徒の前途が長すぎて倦怠を生じはしないですうか。」
上「永い短いの問題ではありませ

ん。大きな岩を破碎するのに何千萬年を要するだらうと金鎚でこはす積りで居る様に無信仰の頭で推察しては誤ります。ダイヤモンドなら即座ではありませんか。佛敎は云うて居ます、理想は遠くない各自の本心にあるのだと。千古の暗みも光に會へば一時に晴れます。佛敎の信仰は一念即ち萬年です。永劫の望みも刹那の中に満されます。不滅の自覺も價値の生活も南無の心に輝いて來ます。

行基寺三昧會
一四月十日までに御登山下さい
一大垣驛乗換で老養線山崎驛下車風光絶佳の地
一十日午後四時頃荷物も運送の爲め出迎へてゐます

吾朋便り

□觀道
傳道日割。四月三、四、五日神奈川縣浦賀町吉井眞福寺にて三昧會。同七八九日愛知縣海部郡津島町西光寺三昧會。同十一より七日間岐阜縣海津郡城山村行基寺三昧會。同十八日晝、大阪豊田省三様方同十九日晝、大阪月江方。夜尼ヶ崎甘露寺様方。同廿日晝及夜間。大阪上本町眞松院様方同廿一日、兵庫縣加茂阿彌陀寺様方。

◎誌代報告は五月にエズリます。
定價一部十錢 半年六十錢 一年一圓
振替口座東京四七二八八番 眞生社
編輯兼發行人 土屋 觀道
發行所 眞生社
東京市芝區芝公園第十四號地九番
東京市芝區三田四國町二番地三號
印刷所 玄々堂印刷所

大正十一年二月二日第三種郵便物認可大正十四年三月三十一日印刷本大正十四年四月一日發行